Views from Orienteering

村越 真

長岡さんのガイド養成講習。厳しい視線と言葉が飛び交う。基本技術を身につけるということについて、新たな視点を与えてくれた。

長岡さんの講習

9月29日、長岡さんの講習の見学をした。長岡さんは国際山岳ガイドの資格を日本で初めて取得したガイドの先鋒である。これまで国内では長らく山岳ガイドの活動をしていたが、最近では自分でお客を連れて行くよりも若いガイドの養成に力を入れている。この日も、ガイドの卵6名が参加して、ショートロープの講習が行われた。

傾斜が急だったり、岩場があったりすると、ガイドは客の安全を確保するためにロープ（ザイル）を使う。一般的にロープを使う局面というとロッククライミングだが、ショートロープはそこまでの傾斜はないが、万が一のためにお客の安全を簡易的に確保する方法だ。たかだか数mの自分とお客の距離をロープで確保するために、ショートロープと言われる。特に年配の方を、少しでも滑落の危険のある場所に連れて行くときに多用される方法だから、山岳ガイドの基礎的なスキルと言ってよい。

最初の岩場で、一人がお客役、もう一人がガイド役の二人組でショートロープを使った確保をするように指示が出され、受講生たちが実際に確保しながら岩場を通過した。一通り見たあとの長岡さんの評価は、「全員だめ」。一見厳しすぎる評価に思えたが、説明を聞いて全くその通りだと納得させられた。

長岡さんの発した問いは「それで（もし滑落が始まった時）止められるの？」というものだった。実際、もう一本の補助ロープで安全確保した上で、お客役が滑落を始めたことを想定して動いてみると、ガイド役はことごとくそれを止めることができなかった。実践なら、お客は大けがである。長岡さん流に言えば、受講生達は、形は学んでいても、危急場面で実際にどんなことが起こるのか、そのためにどんなふうにやらなければならなかったのか分かっていなかったのだ。それは、ガイドとして遭遇しうるリスクがちゃんとイメージできていなかったと言い換えることもできる。

この講習は衝撃的だった。その職業や活動に必要な基本的な技術を学習したつもりでいても、その本質は誰もが動作と同じように学習しているわけではないということなのだから。

オリエンテーリングに置き換えてみれば、ショートロープは整置やコンパスワーク、あるいは「地図をちゃんと読む」といった当たり前の技術に相当するだろう。コーチや指導者が当たり

前のように指示していることが、動作の背後にある目的も含めて学習者に習得されている訳では必ずしもないのだ。だから、動作は似ていてもちっともあるべき機能を果たしていなかったり、ちょっと状況が変わった時に応じた対応ができていない可能性があるということだ。

そんな視点で自分の講習と、受講者の学習を再点検してみれば、新たな展望が開けるかもしれない。

ナヴィゲーションのファンタジスタ

９月下旬に行った古地図×地形萌えの東京探訪（４月号で内容を紹介）では、オリエンテーリングの日本代表選手をゲストとして招待した。このイベントは、明治初期の地形図を持って東京郊外の寺社や地形上の特徴を回るものだ。当然地図は古いので建物や道路は役に立たない。だが地形だけはなんとか利用することができる。つまり東京に居ながらにして北欧の荒野や東欧の深い森でのナヴィゲーションが経験できる遊びだ。

招待したのは東大 OLK の結城選手と真保選手。彼らは若いけれど、日本を代表するオリエンテーリング競技者である。一般の参加者に、彼らの優れたナヴィゲーション技術や、初見でどんなことを考えながらナヴィゲーションするのかを知ることで参考にしてもらうために招いた。

スタート前に、彼らに趣旨と古地図（迅速図）の特徴を簡単にレクチャーした。初めて見るに近い迅速図、地形と一部の古い道以外は現在とは全く違う地図内容、しかもどの道が合っているのか分からない中でのナヴィゲーションは、いくらナヴィゲーションの達人と言えど、不安なものだろう。案の定、最初の１，２レッグでの彼らの動きはぎこちなかった。現代の正しい地図であれば、決して犯さない様なミスも犯した。そんな様子を見ていると、最初から古地図のナヴィゲーションに比較的順応していた自分自身が、「神社は尾根の先端にある」とか「神社は遠くから森として分かる」といった、地図からは得られない一般的な情報を活用してナヴィゲーションしていたのだということを思い知らされた。これは、たぶん私が大学時代に都市計画を学んでいたことと無縁ではないかもしれない。

だが、彼らの真骨頂はその後にあった。数レッグ走ると、彼らは、チャレンジングなルートと安全なルートを使い分け始めた。地図上で何がよく分かり、どんな危険があるかを見抜いたのだ。後半には、自分がどんな情報を利用し、どんな意図でナヴィゲーションしているかも、他の参加者に解説しながら走るまでになった。日々のオリエンテーリングの実践の中で、ナヴィゲーションに必要な情報は何か、に常に意識を向ける実践をしているからこそ、全く新しい情報環境の中でも、短時間で、使える情報とそうでない情報を峻別し、それを活用することができたのだろう。

正直、その順応性の高さは、期待以上だった。最初から最後までうまくいくよりも、もっと有益なものを参加者に見てもらうことができたのだろう。そして、「オリエンテーリング競技者はナヴィゲーションのファンタジスタ」という持論を確認することができたことも、僕にとっては収穫だった。

（村越 真）

遠くに見えるマンションの建ち方から、そこに尾根があることを説明しながら進む結城選手